

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2021 年度
氏名	大平知佳	指導教員 (主査)	杉本希映

論文題目	高校時代のスクールカースト地位認知・意識と対人劣等感の関連 —自己不一致に注目して—
------	---

本文概要	
<p>【問題と目的】スクールカースト（以下：SC）とは、学級内の友だちグループであるインフォーマル・グループに地位格差が生じたものである（水野・日高，2019；山中，2014）。水野・太田（2017）は、SC を学級内でのグループの地位格差と定義し、「本人に知覚された主観的なグループ間の相対的な地位」を SC 間地位、そのグループ内での相対的な地位を SC 内地位としている。SC について、劣等感を感じていない人が高校で SC を経験すると、大学生になって劣等感を感ずることがあるという長期的影響が示唆されている（小原・平山，2018）。また、SC 地位の高低だけでなく、SC をどの程度意識しているかが学校適応感と関連していることが明らかにされている（水野・柳岡，2019）。一方、SC についての規定要因は、いまだ明らかにされていない。本研究では、SC の規定要因として自己不一致を仮定した。自己不一致は、低い自己受容や自尊心と関連し（新井，2001；藤原・菅原，2010）、対人意識に囚われやすくなる傾向があること（堀井・小川，1996；志村・岡林，2008）から、SC との関連が予想される。以上より本研究では、自己不一致が SC 地位や SC への意識に影響を与え、それがその後の対人劣等に影響を及ぼすという仮説モデルを検証することを目的とする。</p> <p>【研究方法】調査対象者：青年期の男女 266 名（年齢の平均値：20.62 歳，$SD=1.80$）。調査内容：①フェイスシート②仲良しグループについて（水野・日高，2019）③SC への意識（水野・柳岡，2019）④SC 地位認知（水野・日高，2019）⑤自己概念（石津，2012）⑥対人ストレスイベント尺度の対人劣等項目（橋本，1997）。</p> <p>【結果と考察】t検定，一要因分散分析，ピアソンの積率相関係数の結果，性差や学校種による「SC 地位認知」と「SC への意識」に差は認められず，高校の偏差値と「SC 地位認知」，「SC への意識」の関連も認められなかった。これは，軽微ないじめについて高校生が一定の割合で被害に遭っていること（浅田・原，2018）から，SC のようなネガティブな側面があるものは，性別や学校種，偏差値に関係なく全体的に認知されていることが示唆されている。また二要因分散分析の結果，高校生の頃に SC のどの地位にいたのかではなく，高校生の頃に SC をどの程度意識しているのかが，後の「対人劣等」に影響を及ぼしていることが示された。この結果は，公的自己意識が高い人が対人関係ストレスを経験すると，対人不安が高まること（伊藤・丹野，2003）や，SC の有無が現在の劣等感に影響を及ぼしている（小原・平山，2018）という先行研究の結果を支持するものである。さらに共分散構造分析の結果，過去の「自己不一致」が，「SC 地位認知」と「SC への意識」に影響を与え，過去の「SC への意識」がその後の「対人劣等」に長期的な影響を与えていることが示された。また，「自己不一致」から「SC への意識」を媒介して「対人劣等」に影響を及ぼす間接効果も認められた。この結果は，自己不一致が低い自己受容や自尊心と関連している（新井，2001；藤原・菅原，2010）ことや，「社交性」における自己不一致は，「何か失態を犯すのではないか」などといった予期不安と関連があり，対人場面での不安・緊張は，「否定的な公的自己意識」を高めること（相澤，2001）と関連していると言える。つまり，「自己不一致」が高いと，自己受容ができずに対人場面での不安や緊張が高まり，「SC 間地位」や「SC 内地位」を低く捉えてしまうことが考えられる。以上のことから，後の対人劣等を強めないためには，高校生の頃の「SC 地位認知」ではなく「SC への意識」に囚われないようにすることが重要であると考えられる。そのためには，高校生の頃に「自己不一致」を高めない支援を行う必要があると考える。</p>	